

令和3年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部 優秀賞(事務次官賞)

「命」を守るキーワード」

宮城県 東松島市立矢本西小学校 6年 ^{おがた}尾形 ^{かんな}柑南

「宮城県に初めて台風が上陸するらしいよ。」

今まで「土砂災害」は、自分とはかけ離れたものだと思っていた。母から台風の上陸を聞き、これまで見たこともなかった「ハザードマップ」を確認すると、どうやら私の地区は安全であるらしい。しかし町内には「危険区域」が存在し、そのすぐ近くには同じクラスの友人が住んでいることに気付いた。これまで気にも留めなかった「土砂災害」への不安が、私の中で少しずつ大きくなっていった。

家族に「危険区域」のことについて伝えたと、消防士の父は「胆振東部地震」の土砂災害に救助に向かった経験を私に話してくれた。平成三〇年に北海道で起こった「胆振東部地震」。最大震度は「東日本大震災」や「熊本地震」と並ぶ、観測史上六例目の「七」を記録。激しい揺れは、広い範囲での土砂崩れを引き起こした。この地震による死者は四三人と非常に多く、地震発生が深夜三時だったこともあり、亡くなった方々のほとんどが土砂崩れに家屋ごと巻き込まれてしまった。

救助現場について父は、辺り一面の家々が土砂に埋もれてしまった凄惨な光景を目の当たりにし、言葉を失くしたという。足の踏み場も分からない現場で救助は始まり、行方不明者の家族は悲痛な面持ちで、夜通し行われていた捜索活動をずっと見守っていた。度重なる余震により、いつまた土砂崩れが起こるか分からない中、自分の命への不安を感じながらも、父は「被害にあった人を一刻も早く助け出したい」と救助にあたったという。捜索活動から一週間余りが経ってやっと行方不明者を見つけ出すことができ、そこで初めて「自分の役割を果たすことができた」と安心したようだ。

先日には、静岡県熱海市でも大規模な土砂災害が発生し、数多くの行方不明者が出ている。報道番組で何度も流れる「土石流」の映像は、まるで私たちの町を襲った津波のようだ。宮城への台風上陸をきっかけとして、私は大切なものを一瞬で奪い去っていく「自然の力」の強大さと、その前には「人の力」があまりにも無力であることを痛感した。だからこそ「自分や大切な人の命を守るためにできることは何か」と強く思うようになり、もっと知ることが必要だと考えるようになった。

土砂災害の原因について調べると、「地震」と「大雨」の二つに大きく分かれ、近年は線状降水帯や雨の降り方の変化により、大雨による甚大な被害が多発している。自然災害全体の死者・行方不明者のうち、土砂災害による死者はなんと全体の四割を占めるという。屋内での被災が多いことも土砂災害の特徴の一つであるが、大雨の情報や警報等が出ているにも関わらず、避難が遅れたり、避難しなかったりする人も非常に多いことが分かった。令和元年には、宮城県丸森町でも台風の大雨により床上浸水や土砂崩れ・土石流などの被害が出たが、町民の避難は一六%足らずと、実際の人々の避難意識の低さがいま見える。

このような実状と近年の土砂災害の傾向から「土砂災害防止法」が改正され、災害に関する情報の明示や避難勧告等の基準の見直しが行われた。また、ハザードマップだけでなく、雨雲レーダーや危険度分布といった「防災ツール」も広く普及し、“避難を決断するきっかけ”として大事な役割を果たしている。

命を守るためのキーワードは「早めの避難」だ。これは「東日本大震災」を経験した語り部の方たちが強い意志で伝え続けている「逃げろ」というメッセージにも共通している。山と共存してきたこの日本に暮らす限り「土砂災害」は常に私たちの身近にある。だからこそ、決して慌てることなく、正しい知識と情報のもとで「備え」「逃げる」ことが大切なのだと私は気付いた。命を守るための最善の行動を迷わずに選び、自分の強い意志をもって避難することができる人に私はなりたい。